The BAR (Backers Foundation and AIT Residence Programme) vol.17, 2025

活動報告書

岡本 秀

訪問地：韓国、中国、香港、台湾

期間：2025年 6月〜8月

本プログラムでは、中国を中心とした東アジアの芸術・葬礼をテーマに、各地の文物や史跡を訪問しました。これまで日本画の知識をベースに絵画制作を行ってきたことから、日本文化に大きな影響を与えてきた中国の文化芸術に関心があり、中国を渡航先に選択しました。加えて、日中の文化芸術を考える際に、韓国や台湾、香港といったその他の東アジアの地域との文化的なネットワークも合わせて検討したいと思い、複数の国・都市をまたいだリサーチの計画を提出しました。

結果として、6月中旬に関西国際空港を出発してから、8月初旬までの間に、4か国・10都市を52日間で巡りきることとなりました。駆け足でしたが、どの体験も今後の制作にとって無くてはならない経験になったと感じています。

ここでは３つのトピックに絞って、大枠のスケジュールと共にご紹介します。

赶尸と死者のホテル

本プログラムでは複数のテーマを並行して調査しました。

はじめに取り上げるのは、自分が作品のモチーフとしてよく用いる中国のゾンビ、キョンシーに関する取材です。キョンシーのイメージソースとなる各国のお墓や寺社を訪問し、墓葬のルールやお墓の形態を調査しました。

中でも印象深かったのが、キョンシーのイメージ形成にとって欠かせないモチーフである赶尸人（かんしにん：客死した遺体を故郷に送り届ける死体運びの職業）と、義荘(ぎそう:死者の一時安置所)の取材です。

赶尸人のような遺体運びの職業は実際にあったと考えられていますが、時には何百キロもの距離があって、人の手で遺体を運ぶことがどのように可能であったのか、多くの謎が残っています。

また、義荘は赶尸人が遺体を迎えにいったり休息をとるための停泊地だったと伝えられていますが、どのようなものだったのか、やはり想像がつきません。赶尸人については中国湖南省へ、義荘については香港へ、それぞれ手がかりとなりそうな情報をもとに取材しました。

湖南省のトゥチャ族･ミャオ族自治州は、鳳凰古城や乾州古城に代表される、少数民族の古い建築群が残る景勝地として知られています。[図A-1]



[図A-1] 乾州古城（中国･湖南省）

トゥチャ族･ミャオ族には独自の信仰や言い伝えが残っており、赶尸もその一つです。

赶尸人は遺体を故郷まで送り届ける職業ですが、その運搬方法には諸説あり、湖南省では、送尸術という道士が死者を歩かせる呪術が用いられたと言われています。道術を用いて死者を連れ歩くのはキョンシー映画でも定番のシーンです。

赶尸や、送尸術の真偽は確かめようがないものの、思想背景や伝承が生まれた場所を確かめることが新たな制作に繋がると思い、現地を訪れました。

湘西土家族苗族自治州博物館では、湖西につたわる神秘の一つとして、赶尸や道術が実際に紹介されていました。道士が存在し、何らかの役割を担っていたことが、歴史の一部として示されていました。 [図A-2]

また、古書店の店員さんが、トゥチャ族出身の研究者による本を持ってきてくれました。陆群『湘西赶尸』（2006、民族出版社）は全文中国語の本で、調べた限りでは赶尸に関する唯一に近い研究書です。 [図A-3]





[左: 図A-2] 湘西土家族苗族自治州博物館、トゥチャ族の儀式

[右: 図A-3] 古書店スタッフ紹介の湖西赶尸関連書

また、特に気になっていたのは気候や土地の険しさです。赶尸人は、150km以上の道のりを2人1組になって遺体を運んだと言われています。

高温多湿の険しい山のなか、遺体を腐敗させずにどうやって運んだのか。具体的に想像してみるために、山間部にあるミャオ族･トゥチャ族の集落を訪問しました。[図A-4]

ほとんど何もない田舎の田園地帯でしたが、住民と少し話をしたり、環境を体験することで、映画や伝聞とはまた違うイメージを得られました。

さらに山間部を歩いている途中、山中にお墓がぽつぽつとあり、ミャオ族独自のものではなく漢族の様式が採用されていることにも驚きました。

ミャオ族･トゥチャ族と書き分けていますが、実際に見てみると、お互いの文化がどちらもなく混淆していて、その中に中国の宗教観や清代以降の漢族の文化が入りこむ形となっています。現代では多くの場所が観光地化されていますが、そのようなポピュラー化も含めて、様々な文化の混じり合いと風土を体感できたことが大きな経験でした。



[図A-4] 山間部にあるミャオ族の集落

はじめから文量が長くなってしまいましたが、客死した遺体を一時的に保管しておく「義荘」という場所についても触れておきたいです。通称「死者のホテル」と言われていて、最も大きな「義荘」が香港に残っています。東華義荘と言いますが、残念ながら取材を断られてしまい、入り口近くまでしか入ることができませんでした。

その代わりに、付近にある巨大なキリスト教墓地で、献花を販売しながら墓地の保守を行う一家に出会いました。丘になっている墓と墓の中腹に小さな商店があり、そこに一家で住まわれているのだそうです。

なんと、お店の方のひとりが鹿児島に10年近く住んでいらっしゃった方で、香港の墓葬文化について日本語でお話を伺うことが出来ました。

墓石の字を彫ったり、洗骨を担当したりもするそうで、実際の現場も少し見せていただくことができました。東華義荘に関しても、今後取り次いでいただくことが出来るかもしれません。本プログラムがなければ決して無かった出会いの一つだったと思います。



[図A-5] キリスト教墓地(個人墓のため許可を頂いて遠景から撮影しました。)

風水と景色の造形

どの地域・分野の調査でもキーワードとして上ってきたのが「風水」です。

今回リサーチを行ったなかでは、韓国・ソウルと中国・北京における都市の景観デザインや、東アジア各国のお墓やお寺の立地・造形、山水画の構図、果てには韓国における日本の植民地政策（※１）など、様々な観点に風水思想が関わっていました。

たとえば韓国で訪れたソウルの景福宮と、中国・北京の紫禁城（天安門広場）は、背後に大きな山を、前には水路や川が流れる、風水の理想に沿った場所に建てられています。

マップをみると、ソウルも北京も、共通した構造を持っています。[図1]



[図B-1] 北京　左：景福宮、ソウル　右：天安門広場

本プログラムでは、そのアイデアがどのように体現されているのか、城内や周囲の街を歩いて確かめることができました。景福宮と天安門広場の写真の、どっちがどっちだか分からない感じを見てもらえれば、共通性を少し感じてもらえるかもしれません。[図B-2、B-3]


[図B-2] 背景に北岳山を臨む景福宮。
ソウルでは街のほぼどの地点からでも北の方角に山が突き出すように見える。




[図B-3] 左：景福宮　右：天安門広場

その後の旅程で見た山水画の展示では、伝統的な山水の構図に風水思想が根付いていることが示されていました。風水において気の通り道は龍脈と呼ばれますが、山水画はこの龍脈が画面内を流れるように構成されているそうです。

お墓の位置や埋葬方法にも風水が関係しています。理想的な立地が決まっているので、お墓を訪問すると、韓国や台湾、香港でも同じ景色の作り方が繰り返し見られました。 [図B-4]

都市や絵画といった、三次元二次元を問わない「風景」のかたちをつくるのに、中国において、また台湾・香港・韓国において風水が非常に重要な位置を占めていることが確認でき、とても印象深かったです。

このように、地域や学問分野で見ると、まったく関係のないものに見えても、思想の根元をたどっていくうちに支流が近づいていくような感覚があり、当初から掲げていた東アジアの文化的なネットワークを感じられるように思いました。



[図B-4] 風水的に安定した位置にある香港のお墓



[図B-5] トゥチャ・ミャオ族の漢族墓

※1 景福宮……風水思想に基づき、「山を背負い、水を前に置く」理想的な「明堂」に建てられています。日本が韓国を征服した後、ここには朝鮮総督府が建ちました。南面する広場に対し、あえて少し東にずらして建設するなど、設計に風水が利用されたという説があります。この際、宗教学・民俗学研究者の村山智順が総督府の委嘱で制作した『朝鮮の風水』は、今でも風水研究書の主著となっています。

日本統治時代の絵画

最後に報告したいのは、日本統治時代に制作された近代絵画を実際に観られたことです。本プログラムでは、韓国国立現代美術館(果川館)、台湾国立歴史博物館・臺北市立美術館、香港のM＋で直接作品を観ることができました。

こちらについては事前学習のため、渡航直前に福岡アジア美術館を訪れました。図書資料室を利用して、日本統治時代の東京・ソウル・台北・長春で、大日本帝国政府が主導した官展というコンクールに関する展覧会図録を中心に閲覧しました。

1945年の終戦まで続いた官展では、宗主国が求めた技術的要請に答えるために、画家は日本人の絵画技法をさかんに取り入れました。そのため、台北やソウルの近代絵画では、日本画の技法を使ったものが見られます。

特に気になったのは陳進（1907-1998、台湾）と李惟台（1916-1999、韓国）で、どちらも国立の博物館施設が所蔵しています。

李惟台に関しては、韓国国立現代美術館で目当ての作品を鑑賞できました。[図C-1,2]

陳進の作品所蔵館では常設展がなく代表的な画風とは異なる数点が展示されていました。[図C-3]ちなみに、展示のあった台湾国立歴史博物館は、東京大学の総合研究博物館との共同企画で台湾ランをテーマにした展覧会を開催中でした。

韓国国立現代美術館では常設展で日本統治下の絵画に一室を設けており、臺北市立美術館でも統治時代に日本人画家に師事した台湾人画家の回顧展※2が開かれていました。

さらに、香港のM+では広東地方の近代美術を紹介する展示※3が開催されており、ここでも日本画の技法をつかった作品が散見されました。

戦争に対する批判的な検討とともに、植民地時代の画家がさかんに省みられている様子を現地で伺うことができました。



[図C-1] 左から、李惟台《探求》《和音》（ 1944,韓国国立現代美術蔵 ）



[図C-2] 李惟台《探求》の接写



[図C-3] 陳進《春蘭》（台湾国立歴史博物館）

李惟台の絵画技法において、たとえば中村大二郎《ピアノ》（1926年、※4）や丹羽阿樹子《遠矢》（1935年、※5）のように、絹を支持体として描かれることの多いモダンな女性の風俗画の様式が、韓紙ベースの支持体に移植されていることが興味深く、細かい部分でありつつも、韓国国内で醸成された矜持や信念や必然性を考えさせられるところでした。

また、福岡アジア美術館のアジア・コレクションでは、東南アジア系の作家が重点的に取り上げられており、「東アジア」というくくりの周辺に広がる更なるネットワークにも気を配って取材しようという意識づくりにもなりました。

※2「懷德樂美—倪蔣懷紀念展」（2025/06/26 - 2025/09/28、臺北市立美術館・台湾）

※3「Canton Modern:Art and Visual Culture, 1900s–1970s」（2025/06/28 - 2025/10/5、M+・香港)

※4 https://kyotocity-kyocera.museum/100_selections/003

※5 https://kyotocity-kyocera.museum/event/cr2023s_ws0527

まとめ

他にも、北京のレジデンス先のInside Out museumで観た「Life Rehearsal」と韓国・光州の「Crossing the Line:Our Bodies,Embedded with Others」がどちらもアクセシビリティをテーマにした展覧会で、重なるアプローチが観られたことや、文人画の口ケ地として名高い黄山(黄山市)と、蘇州の歴史的庭園群(蘇州)など、文人画の隆盛を支えた舞台に足を運んだ上で、上海や広州、台湾の実際の文人画や、現代美術を鑑賞したり、あるいはイスラム教の墓地やモスクを取材したりなど、多くの鑑賞の機会に恵まれました。[図D-1]

異なる場所で見た出来事が重なり合って、なにか別の輪郭を描き出していくようで、その連なりを絵画や作品に落とし込めたらどんなに豊かだろうと今からわくわくしています。

複数の国・都市をまたいでフィールドワークを行うことは、その他の海外交流助成では実現しづらいことで、他では決して出来ないことをたくさん経験しました。今回このような機会をいただけたことを、本当に僥倖に感じています。

改めて、本プログラムと、ご支援をいただいた皆様に深く感謝申し上げます。



[図D-1] 黄帝が仙薬を飲み不老不死となった逸話の残る黄山。